

希望の心理学へ向けて¹

— 研究覚書 —

渡 辺 弘 純

(教育心理学研究室)

(平成13年10月25日受理)

Toward A Psychology of Hope : Study Notes

Hirozumi WATANABE

1. 子どもたちの希望の現在

2001年8月1日付の新聞各紙(朝日新聞, 毎日新聞, 河北新報など)は, 日本の中学生と高校生が, 他国に比べて, 「21世紀に希望を持っていない」との調査結果を一斉に報じた。日本青少年研究所が, 日本(東京), 韓国(ソウル), 米国(ニューヨーク), フランス(パリ)の4か国の中学2年生と高校2年生, 各国約1000名を対象に行った「新千年生活と意識に関する国際比較調査」によれば, 「21世紀は人類にとって希望に満ちた社会になるか」という質問に対して, 日本では62%が「そう思わない」と回答したのとは対照的に, 米国では86%, 韓国では71%, フランスでは64%が, 「そう思う」と回答しているのである。また, 「社会で努力すれば成功のチャンスはあるか」, 「将来の私は今より立派になっているか」などの質問に対して, 他の3か国に比べて最も否定的な回答を行っている。一般に, わが国においては, この種の質問に対して, より否定的, あるいはより悲観的に回答する傾向のあること(佐藤, 1986: 北村など, 1991: 東, 1994)が知られているが, この対比的な回答は, 文字通りに受け取ることができることも解される。

希望喪失の客観的条件が生まれているという指摘であると考えられる経済学(橘木, 1998)や社会学からの報告が注目されている。佐藤(2000)は, 戦後拡大されたかに見えた階層移動が, 団塊の世代以降縮小してきていることを, 社会調査の解析から論じている。すなわち, (1)戦後の開かれた選抜社会, 「努力すればナントカなる社会」は, ①学歴-昇進による専門職・管理職への上昇の可能性が社会の多数に開かれたこと, ②半熟練職や非熟練職から専門職・管

1 この研究の一部は, 平成13年度~平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(2)(課題番号13610143)による助成を受けて行われたものである。

理職への移動のようなホワイトカラーとブルーカラーを横断する流れが存在したこと、③半熟練職や非熟練職から自営＝「一国一城の主」への別の上昇ルートが開かれていたこと、といった戦後的階層－移動パターンが作りだしたものであった、(2)この階層移動を信じられるということが、質の高い労働力を生み、それなりに豊かで安全な社会、希望をもてる信頼できる社会をつくりだした、(3)しかし、現在、これらの階層移動の回路は閉じられつつあり、「努力してもしかたない社会」へと転換してきている、というのである。そして、不平等社会、すなわち、階層の再生産が行われる社会へ向かい、総中流意識は崩壊し、閉塞感が漂う時代へと移行したというのである。

このような提起を受ける形で、荻谷（2001）は、子どもたちが学校で学ぶ意味を見失ったり、学習意欲を喪失している原因として、一般に、「豊かな社会」の出現や少子化による受験競争の弛緩、あるいは「終身雇用」崩壊の影響があげられることに、異論を提出する。彼は、「だれの意欲が減ったのか」を問い、所得格差や雇用の不安定化が進むなかで教育における格差の拡大があり、経済的・社会的な階層間格差の拡大を背景にして、これが学習意欲格差へと導いている、と警鐘を鳴らすのである。たとえば、社会階層グループごとの「学校外での勉強時間」の違いをみると、20年前と比較して、全体として、どのグループも勉強時間が減っているが、より勉強時間が減っているのは、階層下位グループや中位グループであり、上位グループの減少はそれほど目立たないという。同様の傾向は、「落第しない程度の成績でよい」や「今の成績に満足している」や「授業がきっかけとなってもっと詳しいことを知りたくなる」にも認められるともいう。そして、教育における階層間格差の拡大への対処として、(1)教育の初期段階すなわち「下に手厚い」教育により、初期の格差を抑えること、(2)試行錯誤期や職業経験を経た後の青年期段階における専門教育や職業訓練の機会の提供によって、青年期の移動可能性を高めること（意欲と能力のある者へのやり直しの保障）を提案するのである。

一方、今日、高校や大学を卒業しても無業である者の比率が激増している事実がある（文部科学省、2001）。高卒では約35%、短大卒や大卒では約25%、がそれぞれ無業者なのである。そして、いわゆるフリーター（労働省、2000）が150万人を超え、高校三年生の二割がフリーター志向であるとも言われる。フリーターに対する調査（リクルートリサーチ、2000）では、「自分に合う仕事を見つけないので、それまではアルバイト」、「正社員として採用されなかったから」などの回答以上に、「アルバイトのほうが働く時間を自由に決められるから」、「定職だと会社に拘束されることが多くなるから」などの理由づけをする青年が増加していることも報告されている。同時に、フリーターの多くが「定職に就きたい」と考えていることも並存している。

後藤（2001）は、労働力市場の変化から、子どもたちの希望の現在に関わる議論を展開する。彼は、雇用システムの側が大きく変化するなかで、就職に必死にならない若者が少なからずいるという事態は、この変化に対する若者の側の自己防衛反応とみたほうがよいのではないかと述べる。長期雇用と年功型賃金に代表される日本型雇用という労働者の働き方・生活の仕方の「標準」が揺らぎ、技能訓練を企業のそとに出し、「即戦力」を必要なときに必要なだけ雇い、状況が変わればいつでも解雇する、というタイプを主力とした労働力市場へ向けての大転換、すなわち、「使いつぶし」型の処遇が広がりだしたため、若者のほうが早めに見切りを付けたり、おびえて後向きになったりしている、というのである。真面目に努力して学業成績を上げることが就職への近道であった時代からの突然の転換に若者が戸惑うのは当然なので

ある。彼によれば、多国籍企業本社あるいはその周辺にいる上層ホワイトカラーの管理労働者や技術労働者の仕事は増え、処遇もあがる、という。後藤はこの層の予備軍である子ども・青年たちについてはあまり論じていないが、前述の荻谷の論に依拠すれば、今日においても、彼らの戸惑いは少なく、学習意欲も健在なのではないであろうか。後藤は、専ら集中的に、それ以外の労働力市場に入っていく多数派の子ども・青年たちについて論じている。そして、(1)そこにおける学校荒廃（学習意欲の喪失を含む）の根が深いことを指摘し、(2)「がまんして学校に行き続けて何か良いことがあるのか」という問いに真摯に答えなければならないと論じた上で、(3)学校から職業への接続あるいはそこへの多様な角度からの準備を積極的に行う方向を提示する。すなわち、(1)教育の場において、子ども・青年が自分の将来の職業を考えるチャンスと手だてを、多様なやり方で彼らに提供し続けること、(2)青年の失業率が恒常的に高いヨーロッパ諸国において、膨大な社会的支援措置が発達していることに学び、日本には無かった「学校と職業の接続」への大きな社会的支援策を創出すること、が必要である、と提言するのである。

2. 人間の発達における希望の占める位置

われわれ（渡辺，1978：渡辺，1991など）は、さきに、人間の精神発達とは欲求実現へ向けての合目的的活動の高次化であるとする仮説を提出し、欲求の対象と対象の操作様式、すなわち「ねがい」と「実現する方法」との矛盾的關係が人間の精神発達の原動力となり、子どもたちに新しい発達段階へと足を踏み入れさせるのではないかという方向を提示した（図1）。この論考では、暫定的に、「希望」は、「欲求」あるいは「ねがい」と同じ意味を担う概念であると考えておくことにする。このような意味を担わせると、「希望」は、「実現する方法」と共に、人間の発達において、最も基本的な環のなかに位置づけられるのである。すなわち、希望や欲求は、実現する方法が低い段階にあって、それを自己のものにすることができない場合には、実現する方法をより高い水準に引き上げることによって、希望や欲求を現実のものにするように作用する。たとえば、遠くに住む友だちの所へ行きたいという希望や欲求に支えられて、その実現の方法である自転車に乗ることができるようになるために、子どもが必死で練習することを考えればよくわかる。他方、実現する方法が高次になることが、希望や欲求の幅を広げたり、その水準を高くしたりするのである。たとえば、自転車に乗ることができるようになることが、それまで考えもしなかった、遠くに住む友だちの所へ行きたいという希望や欲求を生み出したり、抽象的思考を獲得することが、平和という希望や欲

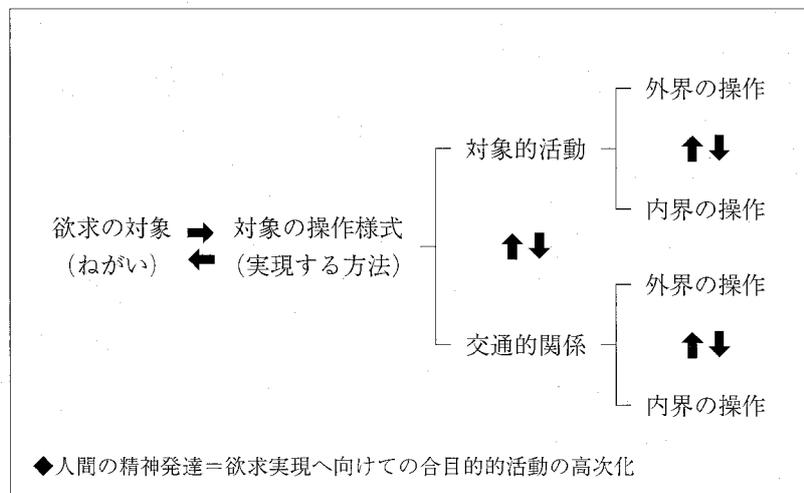


図1 人間の精神発達における欲求の対象と対象の操作様式的位置

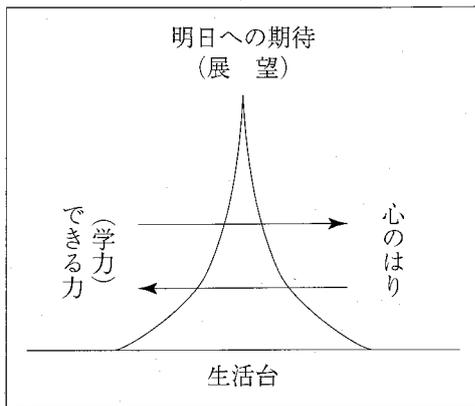


図2 子どもをめぐる問題の構造

また、われわれ（渡辺，1979：渡辺，2000）は、今日の子どもたちに見られる問題の構造を図2のように示してきた。すなわち、(1)子どもをめぐる問題として、生活台、できる力、心のはり、及び明日への期待の四つの側面が取り上げられること、(2)そして、これらは、①子どもの生活の土台が揺らいでいることを背景にして、②学校の授業についていけなくなって「落ちこぼれ」ることと、③毎日の生活に「はり」を持つことができなくなること（一方では、その「はり」を通常の生活の場で感じられず、非行という場でのみ感じる方向へ展開し、他方では、不登校などに帰結する精神的萎縮へと向かう、現象的には正反対の人格の内面の充実感の喪失）が相乗的に作用しあって、その悪循環の繰り返しのなかで、④ついには、明日への期待（展望）の喪失へと子どもたちを導く、といった全体構造のなかに位置づけられるのではないかと論じてきたのである。ここでの明日への期待（展望）は、希望と言い換えることができる。また、この図式は、方向を逆に辿って、明日への期待すなわち希望の喪失が、できる力や心のはりを見失わせ、生活の土台を揺さぶるようになっていく、と展開することも可能なのである。

以上、われわれの二つの枠組みに占める希望の位置を示してきたが、いずれの枠組みにおいても、希望は、人間の発達あるいは現在の子どもの問題を語るに際して、その核とも言うべき中心的な軸上に位置するのである。

3. 日本における心理学の専門用語としての希望の取り扱い

これまで、「希望」を「欲求」や「ねがい」、あるいは「明日への期待」や「展望」と同義に取り扱ってきた。しかし、このままで放置することが許されるはずはない。希望に関わる用語について、多少なりとも解説を加えておくことが求められる。いうまでもなく、本格的に議論を展開し、それぞれの用語の概念を明確化し、用語間の複雑な絡まりあいを交通整理することが必須であるのは自明であるが、本格的な議論は、別の機会に譲り、ここでは、今後検討を深めるための素材の一端を提供することにすることに留めたい。

『広辞苑第四版』（新村編，1991）や『新明解国語辞典第四版』（金田一ほか編，1989）には、日本語の辞典であるので当然ではあるが、取り上げたすべての用語が掲載されている。希望は、「ある事を成就させようとねがい望むこと。また、その事柄。ねがい。のぞみ。」（広辞苑）、「自分がこう成りたい、人にこうしてもらいたいとよりよい状態を期待し、その実現を願うこと。また、その事柄。」（新明解）と説明されている。欲求は、「①ほしがりもとめること。

欲望を満たすために要求すること。②(心)動物や人間を行動に駆り立てるもとなる緊張状態。」(広辞苑)、「何が・したい(ほしい)と日夜それを求めること。」(新明解)として、ねがいは、「①ねがうこと。願望。②特に、神仏に望みごとを祈ること。③願書。」(広辞苑)、「①願う事柄。②願書。」(新明解)として、また、期待は、「心待ちに待つこと。将来その事が実現するだろうと心待ちにすること。」(広辞苑)、「[望ましい事が起こるように]心の中で待ち望むこと。」(新明解)として、さらに、展望は、「(遠くの景色や広く社会の出来事などを)ながめ見渡すこと。また、見渡したながめ。」(広辞苑)、「①遠くまで見渡・すこと(したながめ)。②その社会の出来事や将来性を大所高所に立って見渡すこと。」(新明解)として、説明されている。

それでは、心理学の専門の事典や辞典は、どのように説明しているであろうか。わが国の代表的辞典である『新版心理学事典』(梅津ほか監, 1981)には、希望や展望の項目はなく、もちろん、ねがいの項目もない。欲求の項目もないが、それは要求として、動機づけやフラストレーションや誘因の項目のなかで説明されている。唯一掲載されているのが、期待(Expectation, Expectancy)の項目であり、そこでは、書き出しの部分で、「辞書的な意味では『将来の事象を予期して待ち構えること』で、予期されている事象は何かの意味で『よいこと』であることが含意され、英語でいえば hope に近い。しかし心理学では、より中性的な expectation や expectancy に対応して用いられることが多く、『予期』とほとんど同義である。」と、hope との意味の重なりが指摘されている。そして、図式(schema)や構えや見とおしや計画(plan)、あるいは自己実現性予言(self-actualizing prophecy)との関連についても記述されている。『新・教育心理学事典』(依田監, 1977)にも、希望や展望やねがいの項目はない。期待の項目もないが、ピグマリオン効果(Pygmalion effect)の説明のなかで触れられている。ここでは、欲求(need)のみが取り上げられている。そして、「行動を活性化し推進し統合する要因をさすが、関連する用語が多い。『要求』ともいわれる。われわれは、食物を求め、異性を求め、権勢を求め、名誉を求めて行動する。欲求は、そうした行動を理解するために設けられた動機づけ過程についての説明概念といえるが、内省的には、ある目標に向かって努力するように駆り立てる内的緊張感としてとらえられることもあり、それは、『衝動』あるいは『動因』と呼ばれるし、求められる対象や目標や必要な活動が表象される場合には、それらは『欲望』あるいは『願望』と呼ばれる。したがって、欲求は、衝動や欲望などの背後にあってそれらを生じさせるもの、ということもできる。」と、説明されている。

これらに限らず、わが国において出版された心理学の事典や辞典においては、全くといってよいほど、希望の項目を採用していない。その多くが、欲求や期待の項目を掲載しているにとどまり、ねがいや展望を掲載していない。たとえば、『心理学辞典』(園原ほか監, 1971)や『社会心理学小辞典』(古畑編, 1994)には、欲求と期待が、『教育心理学小辞典』(三宅ほか編)には、欲求のみが、それぞれ掲載されている。『新版精神医学事典』(加藤編, 1993)においても、希望も期待も展望もねがいも取り上げられていない。ただし、欲求は、本能の項目で説明されており、欲望の項目は採用されている。欲求理論(need theory)の項目が存在し、レヴィン(Lewin, K.)を持ち出して、「行動の動因は心理学的に生ずる欲求(need, Bedürfnis)であり、人の内的体系(inner system)に生ずる緊張である。欲求には生得的・生理的な真の欲求と、習得的な準欲求を区別できるが、いずれも個体を取りまく生活空間(life space)の歪曲(不安定な構造)によって発生する。ある欲求が生起するとそれに応じて、一つの体系で

ある人の内部に緊張状態にある下部体系としての一つの領域が分化する。」など、と説明されている。最近出版された『心理学辞典』（中島ほか編，1999）にも、他の事典や辞典と同様、希望や展望やねがいはなく、欲求と期待の項目が記載されている。欲求は、「人間が内外の刺激の影響を受けて行動を駆り立てられる過程（動機づけ）を表すことばの一つで、行動を発現させる内的状態をいう。」などと、期待は、「これから起きると予測できる出来事に先行して生じる観察可能な行動をさす。期待は、その出来事に関する条件づけの経験に依存する。」と、記述されている。そこには、マズロー（Maslow, A. H.）の欲求階層説（need-hierarchy theory）の項目もある。一方、フランスの『ラルース臨床心理学事典』（シラミー／滝沢・加藤監訳，1999）には、わが国の事典や辞書と同じように希望や展望やねがいはないが、臨床心理学と銘打っているせいか、期待、欲求、要求、願望などの項目があり、より多く希望に関連する項目が収録されているようにも感じられる。そこでは、期待は、「自分の持っている客観的要素に基づきながら、ある種の成功を当てにする人の予期。」、欲求は、「欠乏を感じている人の状態。」、要求（仏：revendication, 英：claim）は、「不正義（現実でも仮想でも）を被ったことに対して償いを要求する行動」、欲望（仏：désir, 英：desire）は、「自らの対象を意識化するようになる傾向。」など、と説明されている。

希望の項目がわが国の事典や辞書に見出されないことについて述べてきたが、その対極にあると想定される絶望や絶望感についても同様である。〈うつ病の時代〉と呼ばれるなど、抑うつへの関心が高まっており、Abramson（1988）の絶望感理論が紹介されている（たとえば、鎌原，1995）にもかかわらず、最近に至るまで、わが国の代表的な辞書などの項目には採用されていないのである。わずかに、『新・教育心理学事典』が自我同一性でエリクソンに触れるなかで、説明抜きで字句として記載しているのみである。

事典や辞書に専門用語として掲載されていないだけの根拠によって、当該分野の研究が行われていないと断定することができないのはいうまでもない。しかし、われわれの知る限りにおいて、わが国の研究を概観しても、希望を中心に据えた研究を見出すことができない。したがって、事典や辞書の採用項目にも、現状の一端が示されていると解しても間違いではないと考えられるのである。

このような状況は、なぜ生まれたのであろうか。その主たる理由として、戦後のわが国における行動主義（behaviorism）の隆盛を挙げたい。1940年代から1950年代にかけて、留学生や多様な雑誌を通じて、直接間接に、その考え方がわが国の心理学界に影響を及ぼしたのである。たとえば、先に挙げた『新版・心理学事典』において、東洋は、「期待」の項目で、「S-R理論の立場からすれば、このような認知的な概念は排したいわけであるが」などと記述しているのである。少なくとも当時の測定技術では客観的にとらえられない意識や感情などに関わる不確かな用語を追放した行動主義の立場からは、希望の項目の排除は自然のことであり、「期待」という用語を採用するのが、精一杯のところであったともいえる。行動主義の枠組みの中核部分なして、厳密に定義できる「欲求（要求）」や「動機づけ」という用語のフル稼働で、十分満足できたのかもしれない。

4. 米国における心理学の専門用語としての希望の取り扱い

これらに対して、米国の辞書には、hopeの項目がある。“The Dictionary of Psychology”

(Corsini, 1999) では、“1. An attitude or sentiment having a mixed hedonic quality, characterized by expectation of a favorable outcome of future events. 2. One of the three heavenly graces (I Corinthians 13:13, the other two being faith and charity).” と説明されている。ここには、hopelessness もあり、“An unpleasant subjective sense of being physically, mentally, or socially beyond repair. Feelings of hopelessness are particularly strong in children and adolescents who attempt suicide, as well as in states of alienation and demoralization, and in the grief-stricken.” と記述されている。また、“Dictionary of Psychology (second revised edition)” (Chaplin, 1985) では、“an attitude characterized by an expectation of the favorable outcome of an event. The accompanying emotional tone is often one of fear mixed with anticipated joy. *Contr.* DESPAIR. と説明されている。“Concise Encyclopedia of Psychology (second edition)” (Corsini, & Auerbach (Eds.), 1998) には、hope の項目はないが、hopelessness の項目があり、“Hopelessness refers to a psychological characteristic defined by pessimism or negative expectancies. Within cognitive therapeutic approaches, hopelessness is viewed as a set of negative cognitions about the future. These cognitions have been implicated as relevant for understanding a variety of psychological problems such as depression, suicide, schizophrenia, alcoholism, sociopathy, and physical illness.” と説明し、Depression---Hopelessness---Suicide の図式を示し、“hopelessness mediates the association of depression to suicide” などと展開するのである。

また、“The psychology of hope : You can get there from here” (Snyder, 1994) や “Hope and hopelessness : Critical clinical constructs” (Farran, Herth, & Popovich, 1995) といった hope を真正面に掲げた著書が刊行されている。論文についても、“The past and possible futures of hope” (Snyder, 2000) や “Hope : An emotion and a vital coping resource against despair” (Lazarus, 1999) など、最近では、多数報告されるようになってきており、わが国においても良く知られる “Journal of Personality and Social Psychology” といった著名な雑誌にも掲載されるようになっている (たとえば、Curry, Snyder, Cook, Ruby, & Rehm, 1997 など)。

さらには、これらとは別の流れに属するのであるが、エリクソン (Erikson) は、希望が、人間の生涯に渡る発達を支える、と論じている。たとえば、エリクソンら (エリクソン・エリクソン/朝長・朝長訳, 1990) は、「基本的信頼と不信の間の緊張は、人生の極く初期にまで遡る。その時期の健康な乳児は、頼りになる支えと反応を環境が与えてくれる中で絶えず育っていく信頼を通して、希望の源を発達させる。人間が、宇宙への確信及び信念の感覚と宇宙の法則から関連して予測できることを、その同じ宇宙について抱く弁別的な用心深さと疑惑、その現実的な予測不可能性と依存不可能性などを統合しようと努力することで欠くことのできないこの力は、ライフサイクル全体を通して成熟する。」、 「理想的には、乳児の極く最初の感覚的意識性の基礎となっていく希望感の力は、次第にあまり直接的には認識し得ない経験の領域との、生涯に渡るかかわりのための基礎となる。この最初の基本的な力は、後に続くすべての心理社会的な力が健康的に発達するための支えとなる。」 など、と述べるのである。

米国と日本における取り扱いが、相違しているのは、なぜであろうか。先に、わが国において、希望が心理学の専門用語として取り上げられていない理由として、戦後における行動主義の隆盛を指摘したのであるが、行動主義が生まれたのは米国であり、米国こそが、1940年代と

1950年代を通じて、行動主義が世界中を席卷する震源地としての役割を果たしたのではなかったであろうか。確かに、行動主義こそが心理学の主流であった1960年代以前の米国の心理学界、とりわけアカデミズムにおいて、希望が語られることは少なかったといえる。Snyder (2000) は、1960年代から1970年代にかけて、当時まで否定的にとらえられてきた考え方を逆転させて、希望は、肯定的な期待という一般的な定義のもとで研究された (Stotland, 1969) と述べているのであるが、この時期以後、必ずしも多数の研究者によってではなかったかもしれないが、希望は、心理学の研究対象として、登場したといえるのではないであろうか。

本格的な研究対象になるのが遅かったにせよ、また、少数の研究者によって担われている現状があるものの、今日、日本とは異なり、米国において、希望は積極的な研究対象の一つになっている。その理由の一つとしては、日本に先行した欧米における高齢化社会の到来とそれに対する研究関心の高まりがあったことをあげることができるかもしれない。しかし、それ以上に、欧米における思想の基底に流れる文化的伝統の存在を指摘できるのではないであろうか。すなわち、欧米におけるギリシャ神話やキリスト教文化・聖書の浸透があると考えられるのである。たとえば、希望という言葉聞いて真っ先に連想されるのは、ギリシャ神話の一節である。ヘーシオドスの『仕事と日』(松平訳, 1986) (これが最も古い「パンドラの箱」について記載された文献である) において、希望の由来が、次のように語られている。それまで、人間の世界は、楽しいことに満ちていた。その人間の世界に、オリンポスの神ゼウスは、火を盗んだプロメテウスへの罰として、甕を持たせたパンドラという女を送った。決して甕の蓋を開いてはいけないと言われていたのに、パンドラは、つい甕の蓋を取ってしまった。その甕には、ありとあらゆる災厄が入っていた。蓋を取ったとたん、あらゆる煩い、病苦や苦難が人間の世界に撒き散らされた。パンドラは、あわてて甕の蓋を閉めたのであるが、やっと確保できたのは、希望だけであった。この一節の注釈において、松平は、希望は善であるか悪であるかなど、さまざまな議論のあることを紹介した後、「ヘーシオドスのいわんとするところは明らかで、人間は諸悪に充ち満ちた世にありながら、希望のみを頼りに生きている、ということである」と解説している。

いうまでもなく、わが国において、ギリシャ神話や聖書に比すべきものがないわけではない。ただ、研究者の研究展開の基盤として、これが作用することは少なく、また、一般の人々が、日常生活のなかで、これを普通に意識する状況にないことも事実である。

5. 希望とは何かをめぐる議論

Snyder (2000) は、目標 (Goals), 経路 (Pathways), 及び発動力 (Agency) の3つの構成要素 (ingredients) からなる希望理論 (Hope Theory) を展開している。そこにおいて、①目標には多様なものが想定され、その価値の検討が求められていること、②経路には、目標達成へ向けてのルートへの思考、ルート選択の多様性、障害に出会った時の対処などが含まれ、計画 (plan) や結果期待 (outcome expectancy) と類似した側面があること、③発動力は、動機的な構成要素であり、目標へ向けての運動を引き起こし、それを維持する信念を反映し、効力期待 (efficacy expectancy) と類似した側面があること、などについて検討されている。なお、論文では、文中の表記と図中の表記が異なっているが、図における表記を採用した。また、彼の希望モデル (Schematic of Operation of Hope Model) には、時間軸が設定されてお

り、希望の構成要素の発達の起源との関連 (Snyder, 1994) についても論じられている。さらに、経路因子と発動力因子からなる希望理論にもとづく測定尺度、すなわち、特性希望尺度 (Trait Hope Scale : Snyder et al., 1991)、状態希望尺度 (State Hope Scale : Snyder et al., 1996)、及び児童用希望尺度 (Trait Children's Hope Scale : Snyder et al., 1997) を開発し、パフォーマンスや適応や健康などとの関連について実証的資料を蓄積している。なお、特性希望尺度については、篠原と勝俣 (2001) によって日本語に翻訳され、研究に用いられている。そして、彼は、このような論の展開の上に立って、希望研究の将来の可能性について眺望するのである。

きわめて旺盛な研究展開に圧倒されるのではあるが、現在の地点における彼らの希望研究には、根本的な二つの問題があると考えられる。第一には、彼らの希望尺度が、経路尺度と発動力尺度の二つの下位尺度によって構成されていることがあげられる。彼の希望理論からするならば、目標や目標の価値の検討がなされなければ、総体としての希望に接近することはできないと思われるからである。これについては、彼自身が自覚している。希望研究の将来の課題を論じるなかで、その一つとして、目標 (The Goal Value Issue) について取り上げるのである。そして、次のように述べている。“There is much to be learned about the actual goals that occupy the minds of different kinds of people.” “As we came to understand this panoply of goals, we also will be forced to grapple with value-related issues.” “It would be fascinating to conduct content analyses of the goals that occupy the thinking of high- and low- people.” 目標の吟味の必要性を自覚しながら、なぜ取り扱っていないのであろうか。その理由としては、新しい肯定的心理学 (positive psychology) すなわち希望研究を、確かな方法を用いて、手堅い統計的検討などを含む実証的資料の蓄積の上に打ち立てようとする強い意志の存在が指摘される。彼は、“At the edge of the 21st century, positive psychology needs a solid foundation, a good start.” と述べている。これまでの希望研究には、魅惑的ではあるが、あまりにもあいまいなものを取り扱っているといった、懐疑的で、疑惑に満ちた眼差しが、絶えず注がれ続けてきたことを意識している。彼は、希望の過去を述べるなかで、それへの歴史的皮肉や冷笑に頁を割いているのであるが、堅実な方法的基盤にもとづく実証的資料によって、このような冷たい視線に応える必要があったのである。このために、未だ明確にされていない目標を、現時点では、別枠に入れて、研究を進めていこうとする姿勢が読み取れるのである。第二の問題は、感情を、希望の基本的な枠組みの外に置いていることである。あるいは、これも第一の問題と同様、あいまいなものを排するという立場の表明なのかもしれない。しかし、彼の希望の定義の基盤に目標はあるが、感情はなく、この点では、第一の問題とは異なるのである。彼自身、思考を強調する定義であることを自認し、感情は、目標を目指す思考の副産物として位置づけられるのである。認知的なものとしての希望の定義は妥当なものであろうか。

このような展開に対して、Lazarus (1999) は、「感情としての希望」を論じるなど、希望という概念のなかに、感情を明確に位置づけている。そこにおける感情は、一般に考えられているような、単に何かいいことがあるといったファンタジーではなく、肯定的なものと否定的なものが交じり合った心の状態なのである。授業のレポートのなかで、一人の学生は、『「私の希望って何だっけ?」 そう思って浮かんできたものは、なぜだかはわからないけれど、青い空と私を照らしている太陽のまぶしい風景でした。今も雲一つ無い青空が広がり、木々の隙間から

何本もの光の帯が隣の窓から見えています。そして今、とてもさわやかな気分でこれを書いています。」と記していたのであるが、ここには、否定と肯定の交じり合いがないと断じることでもある。彼は、また、希望は、これに対応する否定的な心の状態、すなわち *despair* や *helplessness* や *hopelessness* や *depression* を考えることを抜きにしては語れないものであるとも述べている。さらに、彼は、「コーピングの過程としての希望」について取り上げ、「希望は不満足な状況の改善を求める努力を刺激することができる」と述べている。これは、Snyder の発動力と対応していると言えるのではないだろうか。言うまでもなく、経路は、「コーピングの過程としての希望」に含み得ると考えられる。Lazarus は、希望概念を、「感情」と「コーピング過程」から構成しているように見える。すなわち、彼は、希望の成分を分かちがたい感情と認知の化合物としてとらえていると解されるのである。彼は、論文のまとめにおいて、「希望するとは、現在は、その人の人生において現れていない前向きの事柄が、それでもなお、現れてくると信じることである」、「われわれは、希望なしには絶望するので希望する」、「希望する能力は、生き生きとしたコーピングの源泉である」、「コーピングの過程は感情としての希望のなかに打ち立てられる」などとも述べている。

Snyder と Lazarus の希望概念には、さまざまな相違があるが、少なくとも二つの共通点があると考えられる。その一つは、希望研究が、きわめて重要な研究領域であるという認識である。たとえば、Lazarus は、“Given that hope is so vital in our lives, it is remarkable that it has not been a center of theoretical attention and research in the social sciences.” と述べている。希望を中心的な研究対象としている Snyder が、希望を重要な研究領域として位置づけているのはいうまでもない。心理療法や個人の物語や心理的外傷や痛みへの耐性や治療の継続や健康心理学や思考の柔軟性などなど、将来の研究展開の可能性について力説するところにも、それが現れている。第二には、魅惑的な研究対象であるだけに、実証的資料を一層堅実に一つ一つ蓄積しなければならないという禁欲的な研究姿勢である。たとえば、Snyder は、“We must be judicious in our claims, mindful that overzealous statements undermine the positive psychology case. And, we must have patience for the fact that the science of psychology is built on accumulating evidence.” と述べるのである。

希望の定義に関わって、さらに検討すべき問題が残されている。その一つは、希望を持つことが「積極的なことか否か」という問題である。Fromm (1976) の言う「持つこと (*having*)」と「あること (*being*)」に関わっている。ドイツの強制収容所の体験記録『夜と霧』(Frankl, 1947) において、フランクル (霜山訳, 1961) は、「一つの未来を、彼自身の未来を信ずることのできなかつた人間は収容所で滅亡して行った。未来を失うと共に彼はそのよりどころを失い、内的に崩壊し身体的にも心理的にも転落したのであった。」と記している。これは、希望の持つ力を表現したものである。しかし、同時に、彼は、自己放棄・自己崩壊と未来体験の喪失の連関について、次のようにも語っている。収容所からの解放の日 (5月30日) を信じて希望に満ちていた仲間 F は、その夢が現実のものにならなかった5月31日、発疹チブスで死んだ。「私の仲間の F は期待していた解放の時が当たらなかったことについての深刻な失望がすでに潜伏していた発疹チブスに対する彼の身体の抵抗力を急激に低下せしめたことによって死んだのである。」と。白井 (2001) は、これを取り上げて、「希望の持ち方」を論じようと試み、「社会の現実から目を背けるのではなく、現実には即した希望を語る必要がある。」などと続けるのである。

これらのことから、希望は、ただ単に持てばよいというものではないことがわかる。まず、最初に、その価値が問われなければならない。次いで、頑なな希望かどうか吟味されなければならないのである。希望の持ち方について言えば、希望が裏切られたとき、一挙に奈落の底の絶望へと導かれるのではなく、それに代わる新しい希望へ向けての転換の模索が開始されることが期待されるのである。絶望へ向かっての希望の転落を阻止し、これを防衛する幾重にも張り巡らされた「希望防衛への層構造」が構築されているかどうかを検討する必要があるともいえる。これは、Snyder のいう経路思考と同じものかもしれない。経路思考ばかりでなく、発動力思考も含んでいると解することも可能であり、Lazarus のいうコーピング過程全体と対応しているようにも考えられる。

ここでは、希望とは何かをめぐる議論の一端に触れてきたのであるが、あまりにも単純な説明であることを承知した上で、差し当たり暫定的に、「希望とは、未来の見通しと期待に支えられて、現在において生じる肯定的な認知と感情の総体に関わる概念である。」と、とらえておくことにする。この説明についても、さらに注釈をつける必要があるのはいうまでもない。たとえば、本来不確かなものを肯定的にとらえていることを自覚しているために、そこには、未来への見通しが誤っていたり、期待が実現しないという恐れも含まれている、などと。

6. 希望、信頼、及び寛容の相互関連についての仮説＝研究枠組み

この論考の最後に、希望発生の基盤についてのわれわれの仮説、ここでは、希望、信頼、及び寛容の相互関連についての仮説と言い換えられるのであるが、を提案しておきたい。

希望と信頼の関係について、真っ先にエリクソンが想起される。前述したように、彼においては、信頼という基盤のもとに、希望が生まれると述べているように思われる。彼 (Erikson, 1959) は、この信頼について、次のように述べている。「私は『信頼』という言葉によって、他人に関しては一般に筋の通った信頼 reasonable trustfulness を意味するようなものを、そして自分自身に関しては信頼に値する trustworthiness という単純な感覚を意味したい。」「信頼という一般的な状態は、自分の外にいる提供者たち outer providers の同一と連続性をあてにすることを学ぶだけでなく、自分自身と、衝動を処理する自分自身の器官の能力を信頼することを意味している。」などと。すなわち、自己信頼について、「自分自身の力についての信頼」と「自分は他者から援助を受けるに足る存在であるという信頼」の両者から成り立っていると述べているように解されるのである。篠原・勝保 (2001) は、熊大式コンピタンス (有能感) 尺度と Snyder の希望尺度 (通路 Pathways 尺度と発動性 Agency 尺度) の相関を検討し、コンピタンス尺度の5つの下位尺度、すなわち、①認知的、②身体的、③社会的、④生活、⑤総合的自己評価の下位尺度のいずれもが、希望尺度の2つの下位尺度、すなわち、①通路尺度と②発動性尺度と有意に相関していることを見出したのである。とりわけ、コンピタンス尺度の生活や総合的自己評価尺度と希望尺度の発動性尺度との間の相関が高かったのである。この有意な相関は、希望と信頼、すなわち「自分自身の力についての信頼」との間の関連性を示す資料であるということができる。また、期待と自己効力との関連性が明らかにされるとするならば、これも、希望と「自分自身の力についての信頼」の関連性を示す資料として位置づけることができると考えられる。結果期待や効力期待についての資料は多数報告されており、安達

(2001)の研究もその一つである。

信頼には、自己信頼ばかりでなく、他者信頼もある。他者信頼について、Rotter (1967)の研究がよく知られている。彼は、社会心理学の立場から、これに接近し、対人関係信頼尺度 (Interpersonal Trust Scale) を、「政治的信頼 (Political Trust)」、 「権威的信頼 (Paternal Trust)」、及び「人々への信頼 (Trust of Stranger)」から構成している。これを受けて、Rotenberg (1990) は、高齢者用に修正した尺度を作成している。これらの対人関係尺度は、「社会組織やシステムへの信頼」と文字通りの人と人の関係への信頼、すなわち、「対人的信頼」の2つの部分から成り立っている。ただし、彼らの尺度においては、目の前にいる具体的友人など密接な関連を持つ他者への信頼を取り扱っていないとも言える。

わが国においても、信頼感尺度を作成する試みがいくつか報告されるようになってきている。天貝 (1995) は、具体的に日々の生活において関係を持っている他者や自己への信頼感尺度の作成を試み、「対自的信頼 (自己信頼)」、 「対他的信頼 (他者信頼)」、及び「不信」の3つの下位尺度から、この尺度を構成している。また、渡邊 (1999) は、日常の友人関係などを含む人々との関係そのものへの信頼としての「関係信頼」、対人関係における他者への信頼である「関係他者信頼」、対人関係における自己への信頼である「関係自己信頼」、および自分自身への信頼である「自己信頼」の4つの下位尺度を想定した信頼感尺度の作成を試み、関係信頼と関係他者信頼をまとめた「関係・他者信頼」、関係自己不信と自己不信と関係他者不信をまとめた「自己・他者不信」、及び「自己信頼」の3つの下位尺度から成る信頼感尺度を構成している。さらに、谷 (1998) は、エリクソンの地点から信頼感尺度の作成を試み、概念的に異なる「基本的信頼感」と「対人的信頼感」から、これを構成している。ここでとらえられる信頼と希望との関連、あるいは信頼と寛容の関連を直接明らかにする研究が行われてはいないが、信頼感と自我同一性 (天貝, 1995) や学校適応感 (天貝・杉原, 1997) や時間的展望 (谷, 1998) の関連性を問う研究は、報告されるようになってきている。

別の角度から、すなわち、高垣 (1999) は、彼の「自己肯定感」という立場から、信頼と子どもたちの「問題行動」との関連について論じている。彼は、自己信頼と他者信頼について、次のように述べている。「素直にありのままの自分をさらけ出し、それを他者に受け容れてもらうなかで生じる他者信頼。そして、身をゆだね受け容れられるに値する自分なのだと実感することによって獲得する自己信頼。つまり、自己信頼と他者信頼とは、同じものの裏表なのです。」と。そして、彼の言う「自己肯定感」は、「そのような他者信頼と自己信頼」、他の言葉で言えば「『他人とともにありながら安心して自分自身でもあり得る』という人間関係」、から成り立つ感覚なのであり、「だから、それは (セルフ・エスティームや自尊感情のように) 評価によって自分を肯定する感覚ではなく、共感によって自分を肯定する感覚」なのである。彼の言う「自己肯定感」は、「自己安心感」とでも表現する方が適切であるようにさえ考えられ、エリクソンの基本的信頼感とロジャーズ (Rogers, 1951 : Rogers, 1959) の自己受容の概念をその根底に据えているように見えるのである。

ここでの仮説における希望と信頼に続く第三番目の環をなしている寛容の研究は、どのように展開されているであろうか。人間の多様性への寛容には、2つの側面、すなわち、「自己と相違する他者への寛容 (受容)」と「他者と相違する自己への寛容 (受容)」があることは、既に指摘してきた。そして、われわれ (渡辺, 1994 : 渡辺, 2001) も、過去10年以上にわたって、研究を蓄積してきた。では、信頼と寛容の関連についての研究は、どのように展開されて

いるであろうか。一般のテレビのコマーシャルにおいてさえ、「ありのままの自分を受け容れられるようになって、自分が好きになりました」といったフレーズを耳にするようになってきている。これに示されるように、自己受容が自己信頼ないしは自己肯定感と結びつくといった考え方はかなり一般的なものになったといえる。しかし、臨床心理学における事例報告は別にして、必ずしも、児童生徒を対象とする寛容、あるいは人間の多様性や相違の受容や拒否に関する研究は多いとは言えず、それと信頼との関連を検討する研究は、一層限られている状況にあるといっても間違いではない。ただし、この問題への接近は、意外な所に蓄積されていると言えるのかもしれない。たとえば、武田（2000）は、児童期における抑うつ傾向と攻撃性の関連を検討し、抑うつ傾向の高い児童が他者に対する攻撃性が高く、自己に対する攻撃性が低いという示唆を得ている。これは、従来、成人においてなされてきた研究結果と逆の結果であるが、超自我の成長に伴って、逆転するという仮説で説明しようとしている。この詳細には立ち入らないが、抑うつ、あるいは悲哀や悲嘆といったものは希望の対極にあるものとして位置づけることが可能であり、一方で、攻撃性は、不寛容の一種であるということができるのである。そのように考えるならば、この研究は、希望と寛容の関連性を指摘する内容を取り扱っているともいえるのである。そして、希望と寛容の中間の環としての信頼は、不用だということを示しているともいえる。これらの問題はともかくとして、長年にわたって研究されてきた攻撃性（岡田，2001など）や暴力や偏見、あるいは障害者との共生など、多種多様な内容が寛容研究に含まれることになり、これらと信頼との関連を示す資料も多岐にわたると推測されるのである。したがって、研究計画を立案するにあたっては、対象を限定して接近する方略を採用することが求められるのである。

なお、これらの他、わが国における希望に関わる従来の研究としては、「三つのねがい」を取り上げた田中・田中（1968）やわれわれ（渡辺，1993）の研究もある。

以上、希望、信頼、及び寛容について、いくつかの問題を論じてきたが、現在の時点において構想される、これらの相互関連を検討する研究枠組みを示すならば、図3の通りである。図は、寛容が信頼を、信頼が希望を創り出し、また逆に、希望が信頼を、信頼が寛容を創り出すことを示している。一瞥するとわかるように、前に見た *Three heavenly graces : hope, faith, and charity* に対応するとでもいうべき、あまりにも壮大な仮説＝研究枠組みである。したがって、粗雑になりかねない危険を絶えず自覚し、長期にわたって、堅実に、一つ一つ実証的資料を積み重ねることが求められるのはいうまでもない。

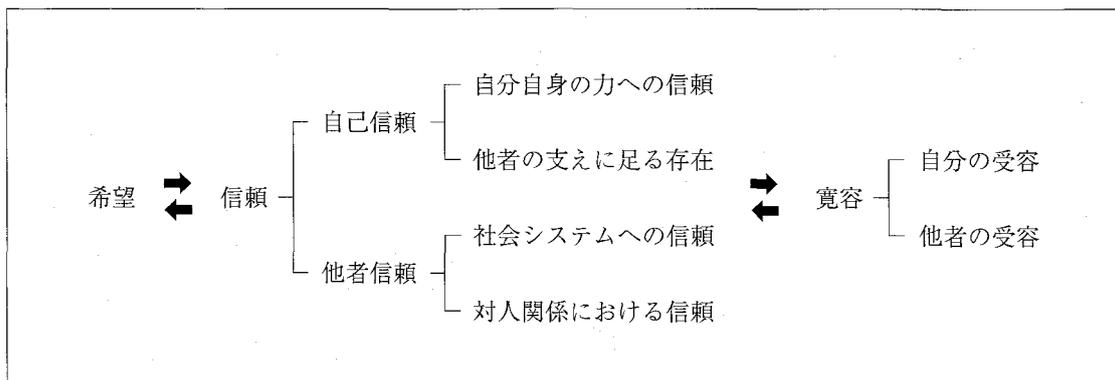


図3 希望、信頼、及び寛容の相互関連についての仮説＝研究枠組み

【追 記】

論文執筆後、日本においても希望の心理学に関わる以下の3つの著書と雑誌が出版されていたことが明らかになった。すなわち、1983年12月刊行の北村晴朗著『希望の心理—自分を生かす』金子書房、1987年3月刊行のポール・ワツラウィック著／長谷川啓三訳『希望の心理学—そのパラドキシカルアプローチ』法政大学出版局、及び2001年10月刊行の雑誌『人文学と情報処理』（勉誠出版）の「特集希望の心理学」である。また、2001年11月3・4日東北学院大学で開催される日本健康心理学会第14回大会（北村晴朗大会委員長）が、『希望の心理』をテーマとしていることを知るようになった。

著者の不明を深くお詫びする。同時に、ここに挙げた4つのうち2つまでが、論文執筆後の出来事であることに示されるように、希望の心理学がこれからの課題であることは間違いない。したがって、本文を訂正する必要はないと判断し、手を入れず、そのまま公刊することにした。

文 献

- Abramson, L. 1988 *Social cognition and clinical psychology : A synthesis*. New York : Guilford Press.
- 安達智子 2001 大学生の職業興味と自己効力感, 結果期待の関連性 *日本教育心理学会第43回総会発表論文集*, 570.
- 天貝由美子 1995 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 *教育心理学研究*, 43, 364-371.
- 天貝由美子・杉原一昭 1997 中・高校生の学校適応感と信頼感との関係 *筑波大学心理学研究*, 19, 1-5.
- 朝日新聞 2001 「21世紀に希望もてない」日本の中高生の6割に 8月1日付社会面記事
(<http://www.asahi.com/national/feature/K2001080100096.html>)
- 東洋 1994 *日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて* 東京大学出版会
- Chaplin, J. P. 1985 *Dictionary of psychology (Second Revised Edition)*. New York: Dell Publishing.
- Corsini, R. J., & Auerbach, A. J. (Eds.) 1998 *Concise encyclopedia of psychology (Second Edition)*. New York: John Wiley & Sons.
- Corsini, R. J. 1999 *The dictionary of psychology*. Philadelphia: Brunner/Mazel.
- Curry, L. A., Snyder, C. R., Cook, D. L., Ruby, B. C., & Rehm, M. 1997 The role of hope in academic and sport achievement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 1257-1267.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle (selected papers of E. H. Erikson)*. New York: Int. Univ. Press.
(エリクソン, E. H./小此木啓吾編訳 1973 *自我同一性—アイデンティティとライフスタイル* 誠信書房)
- エリクソン, E. H.・エリクソン, J. M.・キヴニク, H. Q./朝長正徳・朝長梨枝子訳 1990 *老年期—生き生きとしたかわりあい* みすず書房
- Farran, C. J., Herth, A. K., & Popovich, J. M. 1995 *Hope and hopelessness: Critical clinical constructs*. Thousand Oaks, CA : Sage.
- Frankl, V. F. 1947 *Ein Psycholog Erlebt : Das Konzentrationslager*. Wien : Verlag für Jugend und Volk.
(フランクル, V. F./霜山徳爾訳 1961 *夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録* みすず書房)
- Fromm, E. 1976 *To Have or to be*. Harper & Row.
(フロム, E./佐藤哲郎訳 1977 *生きるということ* 紀伊國屋書店)
- 古畑和孝編 1994 *社会心理学小辞典* 有斐閣
- 後藤道夫 2001 日本型雇用の収縮と教育 *学童保育研究*, 1, 42-49.
- ヘーシオドス/松平千秋訳 1986 *仕事と日* 岩波書店 (岩波文庫)

- 鎌原雅彦 1995 随伴性認知 宮本美沙子・奈須正裕編 *達成動機の理論と展開* 金子書房, 89-114.
- 刈谷剛彦 2001 *階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ* 有信堂
- 加藤正明編 1993 *新版精神医学事典* 弘文堂
- 金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄 1989 *新明解国語辞典 第4版* 三省堂
- 北村晴郎・ステイーヴンソン・H・木村進・加藤忠久・武田悦夫 1991 児童の成績, 能力についての自己評価と父母の評定に関する日米比較 *応用心理学研究*, 16, 19-31.
- Lazarus, R. S. 1999 Hope : An emotion and a vital coping resource against despair. *Social Research*, 66 (2). 653-678.
- 三宅和夫・北尾倫彦・小嶋秀夫編 1991 *教育心理学小辞典* 有斐閣
- 文部科学省 2001 *平成13年度学校基本調査速報*
(<http://www.mext.go.jp>)
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁糺算男・立花政夫・箱田裕司編 1999 *心理学辞典* 有斐閣
- 岡田督 2001 *攻撃性の心理* ナカニシヤ出版
- リクルートリサーチ 2000 *アルバイトの就労等に関する調査*
(<http://osaka.cool.ne.jp/ungifted/freeter/>)
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy*. Houghton Mifflin.
(ロジャーズ, C. R./友田不二男訳 1965 *ロジャーズ選書2 精神療法 (9版)* 岩崎書店)
- Rogers, C. R. 1959 A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed.) *Psychology : A study of science. Vol. 3*. McGraw-Hill.
(ロジャーズ, C. R./伊東博編訳 1966 *ロジャーズ全集4 セラピー・パーソナリティ・対人関係の理論・サイコセラピーの過程* 岩崎学術出版社)
- Rotenberg, K. J. 1990 A measure of the trust beliefs of elderly individuals. *International Journal of Aging and Human Development*, 30, 141-152
- Rotter, J. B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, 35, 651-665.
- 労働省 2000 *平成12年度版労働経済の分析—高齢社会の下で若年と中高年のベストミックス—*
(<http://www2.mhlw.go.jp>)
- 佐藤文字 1986 実存心理検査 PIL の検討1—態度スケールを中心に *岩手大学人文社会学部紀要アルテス・リベラレス*, 35, 125-140.
- 佐藤俊樹 2000 *不平等社会日本* 中央公論社 (中公新書)
- 新村出編 1991 *広辞苑 第4版* 岩波書店
- 篠原弘章・勝保暎史 2001 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性 (1): 中学生の「感情・態度」および「希望」との関係 *日本教育心理学会第43回総会発表論文集*, 87.
- 白井利明 2001 青少年は社会の希望をどのように語るか *心理科学研究会編 平和を創る心理学—暴力の文化を克服する—* ナカニシヤ出版, 32-43.
- シラミー, N./滝沢武久・加藤敏監訳 1999 *ラールース臨床心理学事典* 弘文堂
- Snyder, C. R., Harris, C., Anderson, J. R., Holleran, S. A., Irving, L. M., Sigmon, S. T., Yoshinobu, L., Gibb, J., Langelle, C., & Harney, P. 1991 The will and the ways : Development and validation of an individual-differences measure of hope. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60(4), 570-585.
- Snyder, C. R. 1994 *The psychology of hope : You can get there from here*. New York: Free Press.
- Snyder, C. R., Sympson, S. C., Ybasco, F. C., Borders, T. F., Babyak, M. A., & Higgins, R. L. 1996 Development and validation of the State Hope Scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 321-335.
- Snyder, C. R., Hoza, B., Pelham, W. E., Rapoff, M., Ware, L., Danovsky, M., Highberger, L., Rubinstein, H., & Stahl, K. J. 1997 The development and validation of the Children's Hope Scale. *Journal of Pediatric Psychology*, 22, 399-421.
- Snyder, C. R. 2000 The past and possible futures of hope. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 19

- (1), 11-28.
- 園原太郎・柿崎祐一・本吉良治監 1971 *心理学辞典* ミネルヴァ書房
- Stotland, E. 1969 *The psychology of hope*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 橘木俊詔 1998 *日本の経済格差—所得と資産から考える* 岩波書店 (岩波新書)
- 高垣忠一郎 1999 *心の浮輪のさがし方—子ども再生の心理学* 柏書房
- 武田 (六角) 洋子 2000 児童期抑うつの特徴に関する一考察：攻撃性を手がかりに *発達心理学研究*, 11 (3), 1-11.
- 田中昌人・田中杉恵 1968 *「精神薄弱児」研究の方法論的検討* 心身障害者福祉問題総合研究所
- 谷冬彦 1998 青年期における基本的信頼感と時間的展望 *発達心理学研究*, 9, 35-44.
- 梅津八三・相良守次・宮城音弥・依田新監 1981 *新版心理学事典* 平凡社
- 渡辺弘純 1978 外界に対する操作手段の獲得 *愛媛大学教育学部紀要*, 24, 81-94.
- 渡辺弘純 1979 学校教育 佐々木保行編 *暮らしに生きる心理学* 新読書社, 78-95.
- 渡辺弘純 1991 ピアジェ理論におけるいくつかの問題—「欲求」の位置づけを中心にして— *愛媛大学教育学部紀要*, 37, 89-103.
- 渡辺弘純 1993 小学校中学年期において認知的「自己編集能力」を獲得する意味を検討する *心理科学*, 14(2), 1-16.
- 渡辺弘純 1994 *変わっている友人に対する児童生徒の反応に関する比較文化的研究* 平成5年度科学研究費研究成果報告書
- 渡辺弘純 2000 *自分づくりの心理学* ひとなる書房
- 渡辺弘純 2001 *日本の児童生徒における他者との相違及び他者の相違の認知と受容に関する発達の検討* 平成10年度～平成12年度科学研究費研究成果報告書
- 渡邊俊 1999 *高校生における対人恐怖心性と信頼感* 愛媛大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- 依田新監 1977 *新・教育心理学事典* 金子書房